



## 「日本史探究」

大阪大学・京都先端科学大学名誉教授  
平 雅行

私たちは今、歴史の転換点に立っています。世界は急速に変化していて、変化のスピードはますます早くなっています。そのような中で、次の一歩を、どの方向に、どのように踏み出すべきなのか、私たち一人ひとりが問われています。

「日本史探究」は、こうした困難な時代を生き抜く力をつけるために新設されました。過去の歴史の積み重ねの中で「いま」があり、「むかし」と「いま」との対話のなかで、生徒一人ひとりが未来への道筋を自分の力で考えてゆく、その手助けとなることを願って本書を編纂しました。

本書の特徴は3つあります。第1は「問い」の重視です。一つひとつの歴史事象には、多様な背景があります。また、その歴史的な影響もさまざまです。直接的な原因もあれば、長期にわたる歴史的背景もあります。歴史的イベントの影響も、時間軸の捉え方によって多様な捉え方が可能です。正解は一つではありません。

先生が「問い」を提起し、生徒一人ひとりが自分の力で考えながら「問い」をふくらませ、みんなと議論しあう中で「まなび」を身につけてゆく……。そういう学習活動が可能のように本書は編まれています。

第2は「資料」の重視です。その時代の特徴を鮮やかに示すような資料を提供しました。とはいえ、絵画資料をはじめ、こうした資料についても、時間の幅の取り方によって読み取り方はさまざまです。ここでも正解は一つではありません。資料

から何を読み取るのか、教室で一緒に考えることができる素材を選びました。歴史事項をただ暗記させるのではなく、生徒と一緒に考えて考える授業が展開できるよう、配慮しています。

第3は「熟成した学説」の採用です。研究の進展によって、歴史的事実が書き改められることは珍しくありません。また、時代の変化によって、歴史の見方も変わり、歴史的経緯や評価、その位置づけも大きく変わります。日本史の世界では、日々、新たな学説が提起されています。

とはいえ、未熟な学説を取りあげると、先生や生徒を混乱させるだけに終わりがねません。しかし、臆病なあまり、遅くなりすぎるのも問題です。中世が鎌倉時代ではなく、院政時代から始まるという考えは、1970年には定説化していました。ところが、それが教科書に反映されるのに40年近くかかっています。

早すぎるのはダメですが、遅すぎるのも問題です。本書では、学説の熟度を適切に見極めて、取り入れるべきものを、積極的に採用しました。鎌倉仏教の取りあげ方などは、こうした本書の姿勢を象徴的に示すものです。

世界が急速に変化している中であって、日本歴史の見方や事実認識もまた、不断に更新されているのです。



## 「精選日本史探究」

信州大学教授 大串 潤児

「精選日本史探究」は教科書としてどのような特徴を持ち、学習を進めるうえでどのような観点を重視したのか、まとめてみたい。

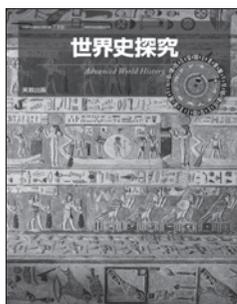
第1に、学習上効果的な図版、史資料を多く用いている。時代の冒頭には「パノラマ」をおき、数万年のながい時間を人口・環境・生業で見通すこと（原始・古代）、「戦乱と飢饉」（中世）、世界に視野を広げること（近世、描かれた日本と地図）、モノ・カネ・情報・人の流れの長期的な傾向をイラスト化する（近現代）、など、時代を通観する問へと接続させる工夫をしてある。

第2に、地域史、災害史、ジェンダー史など、歴史学の最新の成果を盛り込んでいる。特に性差の問題は意識的に記述し、各時代の男女関係（多様な性の関係）を考察できるよう本文を叙述した。また家族や社会集団など人々の関係の多様な姿を可能な限り書き込んである。

さらに地域史、東アジア史・世界的な視点を重視し、地域史特集では京城（ソウル）など現在の日本国内外を問わず取り上げている。地図も改め、例えば「古代の東北地方と北方世界の交流」では北海道南東部を書き込み、大陸からみた「逆さ日本図」も活用した。生徒の暮らすミクロな地域社会と、ユーラシア大陸の歴史的世界との関係に気づくことが出来るよう配慮し（北海道博物館など）、列島の多様な姿や、「日本」という「まとめ」の成り立ちを探究することが期待される。そこではアイヌ史、琉球沖縄史、在日外国人の歴史も重要な要素となる。

第3に、身近な素材から歴史への接近を促す（「動物」）とともに、生徒の関心を惹き易い4つのテーマ（「あそぶ」「はたらく」「つながる」「たたかう」）を全ての時代でとりあげ、各時代の特徴を考えるとともに、その変化から通史的な認識へとつながるよう工夫した。各単元の「まとめ」は「さまざまな人生 時代と社会を考える」として人々のライフサイクルを図版・史料と生徒達の会話を用いて教材化している。地域や階層、性差や身分による多様性をふまえつつ、教科書に登場する人々や出来事をライフサイクルという角度から見直してみることがねらいである。またここでは教科書で学んだ諸事項を相互に関連させて時代や社会の特徴を考察することも意図されている。つまり「ライフサイクルからみると、〇〇ってどんな時代だったろう」という「問い」が意識されることになる。この教科書で学ぶ生徒たちは、どのようなライフサイクルを構想するのだろうか、歴史のなかのライフサイクルを考えることは、今を生きる若者にとっても身近で切実な「問い」につながるのではないだろうか。おわりの単元＝「わたしたちの課題」は、ここまでの歴史的思考の学習をもとに、よりよい社会のありかたを追究していく構成となっている。

こうした特徴を持つこの教科書は、「どうしてそんなことがわかるのか?」「何がわかっていないことなのか?」ということも意識して叙述を行なっている。生徒なりの歴史像を描くこと、そのためのガイドとなるような叙述を目指したのである。



## 「世界史探究」

東京大学・成城大学名誉教授 木畑 洋一

2023年度から新たな歴史科目として登場する「世界史探究」の教科書を作成するにあたり、大きな前提となったのは、2つの点でした。1つ目は、古代から現在まで歴史を通観する科目として従来の「世界史B」の内容を受け継ぎつつも、「世界史B」の4単位と異なる3単位科目であるという点で、2つ目は、先行して2022年から始まる新科目「歴史総合」に接続する科目として位置づけられるという点です。

第1点目に関していえば、これまでの「世界史B新訂版」を基礎としながら、叙述の削減や簡素化が行われました。それが最もよく分るのは人物コラムでの説明文でしょう。最初に登場する孔子の場合、説明文はほぼ半減しています。生徒が学ぶべき点をしっかりと抑えつつ叙述を簡素化するために、執筆者たちは多くの努力を払いました。

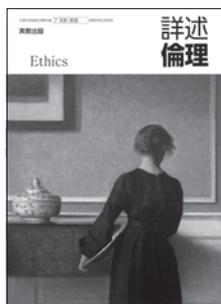
内容面で「世界史B」から変わったところもあります。古代文明に関わる冒頭部分などでの内容構成の変化や、部構成の変化です。後者については、「第3部 諸地域の結合と変容」が18世紀後半から1950年代初めまでの長い期間を扱い、それ以降が「第4部 地球世界の課題」で扱われるようになったという変化が大きいでしょう。これは上記の第2点目と関連しており、「歴史総合」の大項目「近代化と私たち」と「国際秩序の変化や大衆化と私たち」に第3部が、「グローバ

ル化と私たち」に第4部が対応しています。

この第4部が、「世界史B新訂版」と比べて完全に新しい内容になっていることも強調しておきたいと思います。政治過程に焦点をあてながら冷戦期から現在の世界までを叙述する章をおいた上で、この時期の世界経済の展開を検討する章と、科学技術の発展と知識基盤社会の形成を論じる章を配置しました。これは今回の高等学校学習指導要領を踏まえた構成ですが、執筆者の間で熱心な議論が交わされた結果であり、皆様からの反応を楽しみにしています。

第2点目については、すでに触れた部構成の他、「思考力、判断力、表現力」を養うという「歴史総合」と共通した目標のもと、豊富な資料の提示と、生徒にさまざまな問題を考えさせるための問いの設定とに、工夫をこらしました。とりわけ、歴史を資料から考える特別頁ACTIVE欄は、いくつもの資料の比較検討から生徒の思考を促すステップを踏んだ問いを提示し、興味深い部分となりました。また「比較」「結びつき」など六つに分類されたApproachというコラムも、生徒が歴史に向き合う姿勢を強める助けとなります。

このようにして作られた教科書が、新科目で大いに活用されることを願っています。



## 「詳述倫理」

横浜国立大学名誉教授 矢内 光一

『詳述倫理』では学習指導要領改訂（平成30年告示）に伴い、種々の工夫をしました。その際、①教科書としての使いやすさ（学ぶ側でも教える側でも）に配慮する、②指導要領の趣旨に沿った新たな工夫をするという、基本的な考え方に立ちました。

①については、旧版『高校倫理』の思想史の構成を踏まえたものが使いやすいと考え、旧版との連続性を維持しながら、個々の内容を吟味・検討し、より充実したものにしました。

②については、個々の学習箇所が、人生観、倫理観、世界観という学習の基本的な観点のいずれに当たるかを明確にし、そのうえで、「愛」、「善」、「真理」などの諸テーマに焦点をあて、源流思想から近現代にいたるまでの思想を横断的にも把握しうるよう工夫しました。

このように『詳述倫理』は思想史学習とテーマ学習を両立させたものです。

テーマ学習については、①各単元の導入で学習の観点への問いかけを行い、②テーマ別索引を新たに設け（p.223：人生観、倫理観、世界観の学習の観点に分け、各観点のもとに該当する諸テーマをまとめました）、③「愛」、「善」、「真理」などのテーマについて、「Skill Up」（原典資料読解に資する演習調のもの）と「テーマ学習」（解説調の説明）の特集ページで詳しく丁寧に取り上げ

ました。

原典資料を従来以上に多く掲載し、目的意識をもって資料に向き合えるように、資料を読み取るための問いとして「Check!」を設けました。「Skill Up」では各テーマに関わる複数の資料を取り上げ、それらの共通点や相違点を捉えうるように工夫しました。多種多様な課題例を設けたことで、読解力だけでなく思考力・判断力・表現力も培うことができると期待しています。

テーマ学習と原典資料読解力に重きを置きましたが、これは指導要領の趣旨を踏まえたものであり、大学入学共通テストなどでも従来以上に重視されると考えています。

「現代の倫理的諸課題」（p.196以降）では、対話的な手法を通じて他者とともに思索を深めることに配慮した「TRY!」（p.205など）や「Opinion」（p.198など）を設けました。

対話的学習については「哲学対話のやり方」（後見返④）で手順やルールを解説しました。「Skill Up」や「テーマ学習」でも対話的な形の「Try!」（p.61, p.191など）を設け、他者とともに思索する手掛かりとなるように工夫しました。

こうした工夫により、この教科書が生徒の皆様・先生方のご期待にそえるものになっていると確信しています。



## 「詳述政治・経済」

立命館大学教授 森 裕之

日本の政治経済は戦後経験したことのない混迷の中にある。民主主義の基礎である公文書では隠蔽や改ざんが繰り返され、政治上の不祥事は説明責任が果たされないまま社会の表舞台から消えるようになった。政治をチェックするべきマスメディアは十分な機能を果たせず、ネット上には真偽の不確かな情報が氾濫している。そのような状況で、国民は政治に対する真っ当な関心をほとんど失いつつある。

経済についてみれば、日本はこの30年間に国際的地位を大きく下落させてきた。名目GDP(購買力平価換算)は世界2位から4位まで下がった。賃金水準は他の先進国が順調に伸ばす中で、日本だけが横ばいのままとなった。他方では、企業は内部留保を4倍近く膨れ上がらせた。国民の金融資産総額が1千兆円近く増える一方で、5%程度だった貯蓄ゼロ世帯の割合は30%にまで上昇した。そしてコロナ禍は、日本経済の先行きをさらに不透明にしてしまった。

若者をめぐる環境も大きく変わってきた。2016(平成28)年に施行された18歳選挙権に続き、2022(令和4)年4月からは成年年齢が18歳に引き下げられた。彼らは高校時代に大人としての自覚を持つことが強く求められ、それに対応した教育を展開していくことが重大な課題となった。高校の教育現場では、彼らを市民として育てるこ

とにますます大きな責務を負うことになる。

このような状況は令和5年度の『詳述政治・経済』にも大きく反映され、いくつかの抜本的な改訂がなされている。その最大の点は、探究編(第3編)に大きな力点がおかれたことにある。探究編は従来から『高校政治・経済』の特長の1つであったが、学習指導要領の改訂とも相まって、この間の政治経済の大きな変化を受けた改訂ポイントとなっている。今回の探究編では、決まった解答のない政治経済上の課題について様々な意見が存在することがわかりやすく示されている。それらの異なる意見にはいずれも根拠と論理があり、高校生たちは自ら答えを考えることの大切さを学ぶことができる。さらに、社会が多様な意見や価値観を踏まえながら発展しなければならない点も感じ取れるようになっている。

今回の改訂では、全体構成を第1部「現代日本」と第2部「国際社会」に再編することで、高校生により理解しやすい中身になっている。本文以外のところには、時事、Seminar、Skill up、exerciseなどを数多く取り入れ、彼らの様々な関心を刺激することで、政治や経済の問題に一層興味を持ってもらえるようにしている。図表については最新のものがわかりやすく掲載されており、内容・ビジュアルのいずれからも現代日本における代表的教科書となっている。



## 「最新政治・経済」

高校の学習と社会をつなぐ、大判教科書

東京都立戸山高等学校教諭 高橋 朝子

「政治・経済」は、「公共」で習得した概念や人間と社会の在り方についての見方・考え方をもとに、諸課題を探究するという科目であるが、長い人生を生きていく生徒たちにとって重要なことは、現実社会の複雑な課題をどうとらえ、対処していったらいいのか、自ら考えられることである。そのため、基礎知識をもとに、資料を読み解き、考察できるよう工夫を凝らした教科書である。

例えば、労働についてみてみよう。現代日本の課題全般に大きく影響を与えるのが人口の変化であるが、「第1部 現代日本の政治・経済」の「第3編 現代日本における諸課題の探究」のイントロダクションでは、人口やGDPの推移の資料を国際比較も含めてとりあげている。それら資料から、将来の労働力人口の減少という情報を読み取り、「第1編 現代日本の政治」で学習した社会権、また「第2編 現代日本の経済」で学習した労働環境の変化などを踏まえて、自分の理想とする仕事と暮らしのバランス、働き方について構想するヒントが、「第3編6 ワーク・ライフ・バランスの実現を考える」に、フリーランスという働き方などとして紹介されている。そして、ページ最後のTRYでは、構想の実現に向けた施策について話し合うステップが載せてあり、多角的・多面的に考え、表現する手助けとなっている。さらに、「第2部 現代の国際政治・経済」の

「第3編2 外国人労働者との共生を考える」では、グローバル社会における労働という側面から考えを深めるようになっている。

特集ページとしては、時事用語や最新動向を掘り下げた「クローズアップ」、「時事コラム」が30設けられている。一方「Skill up」では、図版資料をどう解釈したらいいか、問題形式で練習できるようになっている。さらに8つの「NAVI」は現実社会ですぐに役立つ情報を掲載している。労働に関連しては、四季報や求人票、給与明細の見方がわかる。そのほか「なるほどQ&A」では、円高・円安って何?といった素朴な疑問に対し、易しく解説している。

各単元は見開き2ページを基本としているが、右上のKEYWORDで重要語をおさえ、図版資料に赤字で書かれているCheckポイントに留意することで読解力も鍛えられる。また、表見返しの「歴代内閣と日本のあゆみ」の年表と、裏見返しの「世界のむすびつき」の地図も見やすい。

すぐに社会に出る前に使用する教科書としても、入試の基礎を固める教科書としても、十分な知識・情報を網羅しており、それを基に生徒たち自身が考えを深め、新たな課題探究にも取り組めるように工夫されていると自負している。

是非、ご活用ください。